

I・HEAP (Historical Justice and History Education)

## 5章 花岡事件と北日本における地域史と記憶形成の実践

担当：池尻良平（東京大学）

### 著者

- ・ Erik Ropers
- ・ 経歴：2012年にメルボルン大学で博士号（歴史学）を取得。  
現在はタウソン大学で日本近代史の歴史学を教えている。
- ・ 研究内容：近代日本の戦時中の強制労働、  
記憶、文化史、文化の可視化、人権
- ・ 主要な業績：



“Voices of the Korean Minority in Postwar Japan” (Routledge, 2019)

“Yū Miri’s Country of Masks and the Debates About Japan’s Wartime Past,” *Southeast Review of Asian Studies* 39 (2017), 63-83.

### ■悩んだ訳語、定義について全体で共有した方がよいこと、読み取れなかった原文

- ・ local historian | 郷土史研究者
- ・ established narrative | 国家の物語（=国家主導で確立された物語）

### ■議題

①p.101の6行目の Kenneth Waltzer の問いの意味

“How widely should we think about testimony and what to call it? Where does testimony begin and where does it end? [Is] survivor memory accessed and shared as truth in wider and more informal ways?”

②学校の歴史の授業で調べたことを文字中心のメディアにまとめるのではなく、  
アートの要素を加えてまとめることの良さは何か

----

### ■イントロダクション (pp.87-90)

①花岡事件とは

1944年8月から1945年8月にかけて、900人以上の中国人労働者と4500人以上の朝鮮人労働者が、秋田県の花岡鉦山の鹿島組の現場で、過酷で非人道的な労働生活を送っていた。1945年6月30日に、約850人の中国人労働者と朝鮮人労働者が蜂起し、周辺地域に逃亡した（この際、4人の日本人労働者と1人の中国人のスパイが死亡）。これに対し、地元当局が民兵や警察などを数千人動員して、逃亡者を追跡した。結果、彼らは逮捕さ

れ、ひどい弾圧を受けた。(事件の前後の過酷な労働や、弾圧時の死亡者も含めると) 1944年8月から1945年10月の間に、986人の中国人労働者の418人(42%)が死亡した。

### ②第二次世界大戦後の流れ

- ・ GHQ が全国的に強制労働の調査を実施し、花岡事件も同様に調査することになる
- ・ 調査官が、鹿島組の社員、民間人、中国人生存者に事情聴取を行う
- ・ 花岡事件の告訴は正当と判断され、裁判所で以下の2つの刑事責任を問うた
  - 1) 会社の幹部と監督者に刑事上の過失があったかどうか
  - 2) 中国人労働者に対して「拷問と残虐行為」が行われたかどうか
 →結果、有罪判決となり、5人が有罪になった

### ③地元の反応

- ・ この裁判の結果は、地元の記録や記念碑、教室ではあまり重視されていない
- ・ 横浜やアジア太平洋の各地で行われた戦争犯罪の裁判は、民間人による重大な戦争犯罪に対する理解をフラット化させる効果がある
  - 日本の戦争時の侵略による多くの犠牲者と生存者の生活、経験、声、さらに、個人/集団/共同体として戦時国家の命令に従った日本人や、抵抗した日本人の声がほとんど消えてしまっている
  - 著者は地域レベルに目を向けることが重要だと主張

### ④本章の狙い

- ・ 花岡事件の歴史を、日本人の児童生徒や教育関係者がどのように構成してきたのか、またどのように関わってきたかを、北日本を中心に検証する
- ・ 地域の記憶文化や教育実践を重視することで、地域の人々が何に対して重きを置いたのかに注目できる
  - GHQによる加害者の法的責任追及の側面から捉えるわけではない
  - 戦争裁判のような法的メカニズムを優遇しがちな国家の物語から捉えるわけでもない
- ・ また、数十年にわたる北日本の歴史・教育・記憶形成に関する共同的で地域主導のプロセスとして、小学校のアートプロジェクトに焦点を当てた調査も行う
  - 戦中・戦後の国家の物語に対抗する挑戦が見えたり、声を聞けたりできる

## ■秋田県の地域の記憶 (pp.90-93)

- ・ 秋田における戦争の記憶は、他の地域の戦時中の日本の標準的な記憶や物語とは異なる
  - 一般的には戦争を通して犠牲になった日本人を強調する傾向にある(東京大空襲など)
- ・ 秋田県では、戦災による被害に焦点が当たる傾向にあり、その結果、強制労働で働いていた人の記憶や証言がより含まれている点に特徴がある
- ・ 例えば、花岡の場合は1950年代になると、少数の地元住民が、農村で起こったことをニュース記事や小説にして多数発表した
  - 例:『地底の人々』=花岡鉦山で働く労働者の生活と体験を描いた小説

- ・この時期、全国的に中国人労働者の悲惨な状況や経験を明らかにしつつ、注意喚起の活動をしていたのは、日本各地の郷土史研究者だった  
→支配的で伝統的な言説が見落とししている出来事を理解するための別の視点を提供した
- ・多くの場合、地域の記憶は国家の物語に「影とニュアンス」を与えるにすぎないが、Seaton が言及しているように「地域の記憶は十分に特徴的で広く地域で語られており、人々は特徴的な地域の集合的記憶を有している」ため、重要な意味を持つ

## ■国家の物語に対する地域の挑戦 (pp.93-96)

### ①日本の集合的記憶の傾向

- ・戦時中の全面的な記憶として、地域の記憶が統合されるのを避ける傾向にある
- ・芸術、映画、文学などの文化的表現を通じて日本の「不正」を主張する傾向がある  
⇒1970年代以降は、日本の保守層が公的な物語や教育政策をほぼ支配していた

### ②学校は、政治的枠組みと地域的枠組みの両方の語りや記憶が見られる重要な場

- ・文科省による教科書の検閲と、30年以上にわたる家永裁判
- ・国側は、暗く恥ずかしい過去を載せたくない  
⇒地域側は、暗い過去こそ学校でしか知ることができないので載せるべきだと反論

### ③地域の学校における花岡事件の授業の開始 (1968年以降)

- ・学年に応じて4~8時間をかけて、以下のような授業計画が作成・実施された

- ・花岡事件を、戦時下の日本と帝国主義の文脈に位置づける
- ・秋田県で働いた中国人労働者のオーラルヒストリーを読む
- ・その特徴や共通点をクラスで話し合う
- ・自分の考えや気持ちをまとめて感想文に書く

- ・日本人=加害者、中国人=被害者という狭い枠組みでしか教えていないわけではない  
→国内の他の戦争被害者（日本人被害者）にも目を向け、議論させることを重視
- ・1970年代は多くの地域の人々（特に当時生きていた人々）は、花岡事件に対してオープンな議論を避けようとする風潮があった
- ・1980年代になると、花岡事件の証言や一次史料に関する児童・生徒の議論や、分析をもとにした革新的なプロジェクトが始まり、風潮が変わってきた

## ■平和の意識を育てる (pp.96-101)

### ①『あの山を越えて』の制作 (図5.1)

- ・地元の公立教師で10年以上花岡事件を教えていた「トキジ ショウジ」が、1984年に児童達とともに、授業や議論をもとに絵で描かれた歴史を出版した
- ・最終的には『あの山を越えて』という、32ページの版画+文章を添えたものとして出版  
→左翼的な政治思想を持つ地域の画家が描いた1951年の『花岡物語』と比較すると、どちらも労働者の苦しみや命の尊さを描いている点は共通しているが、

『あの山を越えて』はより地域の記憶と教育の色が強いのが特徴といえる

- ・地域の小学生による作品は、しばしば記念碑的な性質を持つだけでなく、創造と消費における記憶の選択的なプロセスが強調されているため、注目に値する
- ・『あの山を越えて』の制作は、児童達が教室での読解や議論を通じて日本人と中国人の個人的・集団的な体験を共同で語っているが、ビジュアルアートと物語の記述を用いて作品にすることで、花岡事件に関する当時の人々の記憶や、地域の幅広い記憶を形成することに成功しているといえる
- ・他の地域でも同じように戦時中の歴史を記録する共同的なアートプロジェクトは多く、会話や議論、討論を生み出すために作品を利用するアーティストも多い

## ②リューセンの「歴史意識」との関連からの分析

- ・「歴史意識」の概念を使うことで、会話や議論の中心にある戦時中の歴史の記憶の政治的・倫理的次元を強調できる
- ・『あの山を越えて』のプロジェクトでは、児童は花岡事件から2世代離れていたが、2年がかりのプロジェクトで、児童達は研究者・作家・アーティストになっていた。また、児童達の能動的な学習自体が花岡事件の「記念碑」になっていた。
- ・日本人の地域住民と、捕らえられた中国人との間に共感が生まれる瞬間を明らかにした児童もいた（図5.2）
- ・このような取り組みは、歴史意識に対する研究者の考え方を実現できているといえる
  - 「過去、現在、未来をつなぐことによって道徳的な熟考」をする（Rüsen, 2005）
  - 「重要なのは、学習者が自分自身にとって意味のある枠組み作りを達成できるようにすることだ」（Lee, 2004）

## ■結論（pp.101-102）

- ・記憶の伝達手段として、アートの重要性が認識されているにもかかわらず、通常、歴史家はあまりアートを調べたり、分解して考えたりはしない
- ・上記に対し、Kenneth Waltzer（アメリカの歴史学者）の挑発的な問いは意識すべき「証言について、我々はどれだけ広く考えるべきか。それを何と呼ぶべきか。証言はどこから始まり、どこで終わるのだろうか。生存者の記憶は、より広いインフォーマルな方法による真実としてアクセス・共有されるのか。」
- ・花岡事件は、日中友好協会を中心にした市民団体が、慰霊碑を建てたり、慰霊祭を毎年開くことで風化を防ぎ、結果、2000年に鹿島建設と和解し、補償と博物館の設立などを実現できた。
- ・『あの山を越えて』のようなプロジェクトも、その後数十年にわたって続いている。